

M35a 本邦低緯度オーロラへの関連が疑われる欧文史料の批判的検討

服部健太郎 (関西大学), 早川尚志 (名古屋大学)

通常、明治維新より前の本邦の過去の天文観測を振り返る際、日本語史料が用いられてきたことは論を俟たない。しかし幕末期は例外的な時期で、開港地で欧米出身者が欧文で史料を残している。実際にこのような史料には過去の天文現象、気象現象を記録したものが散見される。本報告ではその内、1859年と1872年の日本における低緯度オーロラを目撃記録の可能性がある同時代の欧文史料について批判的検討を行う。まず、1859年当時、蝦夷地の箱館（現 北海道函館市）に存在していたロシア領事館に勤める医師により記されたドイツ語記録を取り上げる。ユリウス暦1859年8月21日（グレゴリオ暦1859年9月2日）に、箱館から北方に位置する有珠山が噴火したことを記していた。この日はキャリントンイベントに伴う低緯度オーロラの観測記録が日本各地に見られる日と一致する。現地史料では有珠山や駒ヶ岳等、箱館より北に位置する火山でこの年の噴火記録が見つかっておらず、観測者がオーロラを火山噴火と誤解した可能性が高い。次に、グレゴリオ暦1872年2月10日付の長崎の週刊英字新聞にて報じられた Omura（現長崎県大村市）の火事の記事を取り上げる。大村から火災の報告が届いたわけではなく、水平線に見えた光より、長崎から北方に位置する町の大村に火事があったと推定されたものとみられる。時期は過去1週間のうちとされており、2/3-2/10の間と考えられる。この中に、日本で1872イベントに伴う低緯度オーロラが見られた1872年2月4~6日が含まれてはいるが、日は確定できない。前者は発生時間、後者は発生日が特定できない。また両者いずれも、空の様子に関する具体的な記述はない。しかし、低緯度オーロラ、火山の活動、都市の災害の履歴を考える上で、重要である。